

## 夏目漱石『一夜』想起

Junko Higasa 2016.3.17

朝の通勤電車を待つ間、線路わきの僅かな土の上に、生まれたての緑が輝いているのが目に留まる。そのとき、夏目漱石『一夜』を思い出した。

『世の中が古くなって、よごれたか』『よごれました』確かに多くの戦争やテロでよごれた。自然も人の心も。美しき多くの人の、美しき多くの夢を『縫えばどんな色で』『絹買えば白き絹、糸買えば銀の糸、金の糸、消えなんとする虹の糸、夜と昼との界なる夕暮の糸、恋の色、恨みの色は無論ありましょ』縫えば誰に贈らん。それは愛しき人に。では、欲はどんな色をしているのだろう。

当世の小説は、無闇に走り続ける世の中の欲を縫い取らず、糸束のまま写したもののばかりが流行る。文明も便利だが、行き過ぎると人を墮落させる。何となく閉塞感。生きているのか、死んでいるのか分からないような目まぐるしい世の中に流されるだけでは智者とは言われまい。それが漱石が他者と自分に言った『一夜』の締めくくりの言葉だろう。

生き生きとした緑を目に映しながら「ただ美しい」ものに浸りたいと思った。もしや漱石も、それで「ただ美しい感じがするもの」として『草枕』を書きたくなっただのではないだろうか。『一夜』は『草枕』のベースである。何処で生きても非人情を。どんな小さな世界に在ろうとも、自分の足元に輝く春草に気付かなければ、自分の人生の花の蕾は目に映るまい。